史料紹介：雑誌『共生』と椎尾辨匡の思想

髙　木　茂　樹

0　はじめに

宗教学や仏教学からの椎尾辨匡研究は多数あるが、教育者としての立場からアプローチしたものは少ないように思われる[1]。筆者はこれまで、学内の関連史料を探索するなかで、戦前の校報誌会報「東海」[2] に着目してきた。校長在任時のものに特筆すべきものは見つからなかったが、名誉校長となってからの講演録[3]に興味深いものがあることに気付いた。会報「東海」をもとにして、「東海中学校における名誉校長椎尾辨匡の講演活動　―戦前の校報「東海会報」を拠りどころに―　」（『共生文化研究』東海学園大学共生文化研究所、第２号、2017 年）にまとめ、さらに「東海中学校における椎尾辨匡の講演活動－「共生」の思想と校風を

表１：東海学園と椎尾辨匡の年譜（戦前の関係分のみ）

年代	学園の歴史	椎尾弁匡年譜
1888(明治 21)年	浄土宗立愛知支校として開学	
1892(明治 25)年		愛知支校本科３年編入学
1893(明治 26)年		愛知支校首席卒業（17 歳）
1898(明治 31)年	第４教区宗学教校と改称	内地留学生となり、京華中学校編入学
1899(明治 32)年		第一高等学校入学
1901(明治 34)年	忠魂祠堂（明照殿の前身）建立	
1902(明治 35)年		東京帝国大学入学
1905(明治 38)年		東京帝国大学卒業、宗教大学教授
1909(明治 42)年	私立東海中学校認可	
1911(明治 44)年	宗学教校 13 期にて閉校、会報第一号発行	
1912(大正元)年	９月の台風で忠魂祠堂、校舎大被害	
1913(大正２)年	忠魂祠堂、校舎再建	**第２代校長に就任**（36 歳）
1915(大正４)年		文学博士号を受ける
1916(大正５)年	忠魂祠堂を明昭殿と改称、勤倹誠実の校訓確立	
1920(大正９)年	９月から会報を毎月発行	**１月校長辞任、名誉校長就任**（43 歳）
1922(大正 11)年	校歌制定	第１回共生結衆
1923(大正 12)年		雑誌『共生』発刊
1928(昭和３)年		衆議院議員当選（１期）
1936(昭和 11)年		衆議院議員当選（２期）
1937(昭和 12)年		衆議院議員当選（３期）
1941(昭和 16)年	会報を団報と改称	
1942(昭和 17)年		衆議院議員任期満了
1944(昭和 19)年	団報、物資不足で発行中止	

めぐって」（羽賀祥二編『近代日本の思想と地域社会』吉川弘文館、2018年）で論を進めた。

これらの論文で、「東海学園中興の祖」と言われるゆえんは、校舎再建というハード面ばかりでなく、講演活動などを通じて校風を築いていったというソフト面にあったとの結論に達した。取り上げた講演は、椎尾が校長を辞して共生運動に身を投じた後、名誉校長として時折来校した際に行われたものだ。椎尾講演録の最古は1924年（大正13）のもので、同年の雑誌『共生』には椎尾の「共生」思想のエッセンスともいえる「共生講壇」が連載されている。連載記事は翌年に『共生講壇』として書籍化され、1938（昭和13）年には『共生教本』となり、共生会のバイブルとなった。講演の行われた時期は、椎尾の「共生」思想が体系化された時期とも重なる。（表1参照）

本稿では、椎尾辨匡が東海中学校校長を辞して共生運動を始めた時期に発刊された雑誌『共生』の概要を紹介する。そして、東海中学校の椎尾講演録のある期間（1923～1936年）に限って記事一覧を示したい。雑誌『共生』の記事を会報「東海」の講演録の内容と対比することで特徴的な記述を見定め、椎尾が教育者として何をめざしたのかを探究する一助としたい。

1　雑誌『共生』

共生運動のはじまりは、1922（大正11）年6月21～26日、鎌倉光明寺で53名の参加者によって行われた「第1回共生結衆」にさかのぼる。椎尾の指導講演を主としつつ、参加者全員が起居寝食を共にして、清掃、体操、静坐、念仏、礼拝、共生のつとめ、読誦などを折り込んだ、朝4時半起床、夜10時就床の6日間を過ごした[4]。この結衆を切っ掛けにして、1923（大正12）年5月1日、雑誌『共生』が月刊誌として発刊される。1931（昭和6）年には財団法人共生会となって積極的な活動を展開したが、第二次世界大戦中は雑誌の発行や結衆の開催などに制約を受けた。戦後、組織を立て直し、1971（昭和46）年の椎尾没後も雑誌『共生』の発行は継続され、その活動は1992（平成4）年まで続いた[5]。

東海学園大学には寄贈元の異なる雑誌『共生』が併存している。図書館の林霊法文庫には、一部欠落はみられるが、創刊号から終刊の64巻5号までが網羅され

ている。もう一つは、共生文化研究所にある袖山榮眞前学長からの寄贈本（以下「袖山寄贈本」と表記）で、1939 年の第 17 巻までのものだ。袖山寄贈本の所収期間に限って林霊法文庫と対比してみる（表２参照）。

表２：林霊法文庫と袖山寄贈本の在庫対照表

巻号	林霊法文庫	袖山寄贈本
1（1-10）	◎	◎
2（1-10）	△（1 号欠）	◎
3（1-10）	◎	◎
4（1-12）	△（1・6・7・9 号欠）	◎
5（1-12）	◎	◎
6（1-11）	△（9・10 号欠）	◎
7（1-12）	◎	△（8 号欠）
8（1-12）	◎	◎
9（1-12）	◎	◎
10（1-12）	◎	◎
11（1-12）	×	△（11 号欠）
12（1-12）	×	◎
13（1-12）	△（1～11 号欠）	◎
14（1-12）	◎	△（4・5 号欠）
15（1-12）	◎	◎
16（1-12）	◎	◎
17（1-12）	◎	△（1・3・5・7～12 号欠）

◎欠号なし、△欠号あり、×所蔵なし

林霊法文庫の欠落を袖山寄贈本が補うようになっており、雑誌『共生』の初期のものは 11 巻 11 号を除いて全て揃っている。椎尾の思想を知る上では貴重な史料が一覧できる。

2　雑誌『共生』の椎尾関連記事

表３で示した雑誌『共生』の記事は、東海中学校の椎尾講演録のある 1923 年から 1936 年まで〔1 巻(1-10 号)，2(2-10)，3(1-10)，4(2-5，8，10-12)，5，6(1-8，11)，7-10，13(12)，14 巻〕の一覧である。東海学園大学図書館林霊法文庫所蔵の史料を利用した。

雑誌『共生』は、椎尾の論文、講演録を中心に、共生同人の論考、読者からの質問とそれに対する椎尾の応答、共生会の活動などが掲載されている。1928 年の衆議院議員当選前後から、椎尾の記事には政治的なものが目立つようになる。「立候補の趣旨」(6 巻 2 号、1928 年 2 月)、「昭和維新に際して政界への進出」(6 巻 3

号、1928 年３月)、「政治へ進出して共生の事実」(6 巻５号、1928 年５月）などの署名記事の他、「時事寸評」と題されたコラムも掲載されている。署名は「辨匡」と「節堂」の二種があり、宗教的な内容の場合は「辨匡」、巻頭言やコラム・エッセイなど社会的な内容の場合は「節堂」と使い分けていたようである。

表３：雑誌『共生』の椎尾関連記事一覧

巻・号	年月日	表題	頁
1・1	19230501	真正の涵養	4～63
		（編集後記）	74
1・2	19230601	正態の宗教	6～23
		実生活これ真宗教	24～48
		思想善導に関する文相の訓示について	70～75
1・3	19230701	水平運動と高上運動	2～40
		迷信の掃蕩	41～48
		教役者の問に答へて	49～55
1・4	19230801	平常道の宗教	2～19
		共生の基礎	20～44
		婦人の信仰	45～54
1・5	19231101	大震火災に就いて	2～20
1・6	19231201	大詔を拝して	6～8
		災後の省察	9～28
		有島氏と波多野秋子の死	53～57
		香川県巡り	58～61
		鮮人大追悼会	62～63
		この心を何とせん（投稿への返信）	64～65
1・7	19240101	共生講壇①	6～52
		婦人と災厄	53～58
		災変における同人の活躍	59
1・8	19240220	国民精神作興詔書衍義	3～25
		共生講壇②	26～75
		政争に就て	76～80
1・9	19240320	国民精神作興詔書衍義（承前）	3～20
		開かるゝは生か死か	21～39
1・10	19240420	開かるゝは生か死か（承前）	3～37
		丙午の迷信	38～50
2・2	19240620	共生講壇③（承前）	3～5
		共生講壇④	6～45
		淑女会の実行要目を読みて	46～56
2・3	19240720	日米問題と共生道	3～35
		信仰生活の涵養	36～38
		現実を正視して	39～43

		働いて礼言ふ人	44～50
2・4	19240820	明治天皇を祭る	3～13
		共生講壇⑤	14～53
		災後一周年	54～61
2・5	19240920	共生講壇⑥	3～43
		九月初三日	44～49
		福原栄一君に答へて	54～58
2・6	19241020	復活の曙光	3～13
		共生講壇⑦	14～39
		桂君を弔ふ	49～56
2・7	19241120	共生講壇⑧	3～38
		修養の一路	39～43
		無明の愛	43～50
2・8	19241220	大正甲子の歳を送る	3～8
		共生講壇⑨	9～37
		お正月	38～42
2・9	19250120	新年を迎ふ	5～8
		信仰生活の涵養①	9～32
		結婚に就て	33～39
2・10	19250220	信仰生活の涵養②	3～28
		酒の三十五過に就て	29～36
3・1	19250320	信仰生活の涵養③	5～31
		共生の涵養	32～43
3・2	19250420	信仰生活の涵養④	5～18
		生きて居ると、生きる活かすと	19～26
		普選の成立と教育の充実	27～32
		死んで愛して贖いたいと存ます	32～40
3・3	19250520	釈尊の大訓	8～26
		集の法は総べてこれ滅の法なり	26～30
		一人生きて四圍生く	38～41
3・4	19250620	宗乗の省察	6～36
		「婦人覚醒」の文書宣伝に就て	37～41
		奇禍に死ぬと生きると	41～45
3・5	19250720	宗乗の省察②	6～23
		仏教徒の社会事業	24～33
		相対愛と絶対愛	34～40
3・6	19250820	宗乗の省察③	7～34
3・7	19250920	真の政治家	4～7
		文化の本質に関する仏教の思想（一）	8～21
		仏教徒の社会事業（其二）	22～31
		九月一日	32～36
		人畜の共生	37～41
3・8	19251020	仏教徒の社会事業（其三）	11～20

		文化の本質に関する仏教の思想（二）	21～37
		霊魂不滅に就て	38～46
3・9	19251120	文化の本質に関する仏教の思想（三）	6～22
		優陀那講義（一）	23～35
3・10	19251220	信根	5～14
		立憲的教養	15～18
		優陀那講義（二）	19～30
		仏教の国語化	36～38
4・2	19260220	仏教の哲学的素養（一）	9～19
		仏教徒の生活	20～33
		師範教育に就て	34～39
		優陀那の経数に就て（四）	40～42
		政局の変化	43～44
4・3	19260320	活ける国生きる人	7～21
		仏教の哲学的素養（二）	22～31
		我国の個人思想に就いて	32～38
4・4	19260420	仏教の開発と共生	5～17
		女性教育	18～26
		優陀那講義（四）	27～32
		日本仏教の世界化（英訳勅修御伝）	33～35
4・5	19260520	一切は死し一切は生く	3～4
		僧伽に就て	5～10
		仏教の開発と共生（二）	11～17
		学科の修得（女性教養の二）	18～23
		社会文化の結晶たる浄土教	24～30
		優陀那講義（五）	31～37
4・8	19260820	社会文化の結晶たる浄土教	3～13
		社会的宗教の理論及実際（上）	14～23
		信仰の移転	24～32
4・10	19261020	逆中の白道	6～13
		共生の本尊	14～26
		遇斯光の歓び	27～38
4・11	19261120	秋日静思	3～14
		授戒講話（二）	15～25
		肉を生かして（上）	26～38
4・12	19261220	日本人の使命	6～28
		婦人の本分	29～52
5・1	19270120	大行天皇を悼む	3～4
		大喪に服して	5～24
		授戒講話（三）	25～39
5・2	19270220	斂葬の御儀も終つて	6～12
		剛健精神	13～36
		肉を生かして（中）	37～47

5・3	19270320	涅槃	3～12
		授戒の要領	12～16
		授戒講話（四）	16～31
		宗教法案の修正に就て	42～45
5・4	19270420	全生教育と片輪教育	3～27
		授戒講話（五）	28～43
5・5	19270520	有無の悩み	3～6
		聖恩無窮	7～15
		肉を生かして（下）	16～29
		授戒講話（六）	30～43
		或る婦人の悩み	44～53
5・6	19270620	時！	6～10
		授戒講話（七）	11～29
		蕩児に泣く母	30～37
		教禅二門	38～50
5・7	19270720	授戒講話（八）	12～28
		教禅二門（その二）	29～35
		娘が洗礼うけました	36～43
5・8	19270820	法	3～5
		授戒講話（九）	6～19
		新しき未亡人に	20～25
		異信とその表白態度とに就て	26～37
		三階教の研究	37～42
5・9	19270920	宗教考察の価値	7～17
		慰安の一言を	18～24
5・10	19271020	禅浄二教	5～18
		授戒講話（十）	19～31
		金剛山	36～39
5・11	19271120	善導大師の研究	11～16
		真俗二諦	17～34
		去らんか留まらんか	35～42
5・12	19271220	仏教の現代思潮	6～21
		東洋宗教文化上の善導大師（善導大上師研究其二）	22～36
		祈れる息子が死にました	43～45
6・1	19280120	昭和の維新	3～11
		一般仏教に於ける善導大師（善導大師研究其三）	12～32
6・2	19280220	善導大師の研究（三）	3～24
		立候補の趣旨	25～35
		※椎尾先生の立候補に就て	35～39
6・3	19280320	昭和維新に際して政界への進出	3～18
		浄土教に於ける善導大師（善導大師の研究四）	19～42
6・4	19280420	花祭り	3～5
		釈尊の浄土教と善導大師	6～29

6・5	19280520	政治へ進出して共生の事実	1～21
		印度の浄土教と善導大師（善導大師研究の七）	22～38
6・6	19280620	時難を省みて修養へ	1～16
		支那の浄土教と善導大師（一）（善導大師研究の八）	17～34
6・7	19280720	仏教の特色	1～6
		三宝の体現生活	7～19
		支那の浄土教と善導大師（二）（善導大師研究の九）	20～35
6・8	19280820	封建的陋習の打破	1～19
		原始仏教に就て	20～26
6・11	19281120	婦人の四問題に就て	1～13
7・1	19290120	新年の辞	1
		昭和維新聖業の翼賛	2～6
		議会来る	15～17
		思想国難に就いて	18～20
		現代の宗教要求と善導大師の思想	37～58
7・2	19290220	社会浄化の道	1～21
		※椎尾先生の質問演説（議会速記抄録）	49～60
7・3	19290320	業道（一）	1～14
		よく法を見るもの仏を見る	15～27
7・4	19290420	階級闘争か協調共生か	1～2
		憲法の前途	3～4
		業道（承前）	53～66
7・5	19290520	浄化の道としての流転相と解脱相	1～19
		裸の仏	20～29
		松浦春濤君を憶ふ	46～47
		※椎尾先生の病状に就て	64～65
7・6	19290620	満七年に生きて	1～2
		思想善導批判と宗教	3～8
7・7	19290720	菩薩の家	1～16
7・8	19290820	昭和青年の覚悟	1～21
		猿	35～36
7・9	19290920	最近共生運動の事実	1～17
		跡	18～21
7・10	19291020	共生の原理及組織（一）	1～19
		※予定日誌	80
7・11	19291120	共生の原理及組織（二）	1～29
7・12	19291220	共生の原理及組織（三）（四）	1～33
		共生より見たる教育	34～46
8・1	19300120	信なるかな	1
		共生の原理及組織（五）	2～21
		※師表の政界進出に就て	38～42
		※シイオ会に就て	75
8・2	19300220	衆議院議員立候補に際し―同人各位へ―	1～6

		共生の原理及組織（六）	7～22
		見聞聞法の楽	23～43
		※衆議院議事録抄録	72～73
8・3	19300320	落選のあとに	1～16
		※聖戦に参加して	17～22
		共生の原理及組織（七）	23～40
8・4	19300420	共生の原理及組織（八）	1～16
		悩みの解決の二三事例	17～29
		※師表の和歌山御巡講にお供して	60～66
8・5	19300520	禁酒と修養	1～13
		真の復興	14～21
		原始仏教と浄土教	22～26
		浄土教の頂点	27～38
		共生記念日	61
8・6	19300620	国家安定の基	1～4
		浄土教の起源について	5～19
8・7	19300720	信仰に活きよ	1～3
		大生の一路	4～5
8・8	19300820	信念の教育	1～14
8・9	19300920	共生主張の特色	1～10
8・10	19301020	秋霜来る	1
		現代思想の解決	2～23
8・11	19301120	地に立てる仏	1～27
		婦人ともいきの使命	56～65
8・12	19301220	送年迎年	2～3
9・1	19310120	生くるものゝ喜び	1
		剛健なれ	2～3
		青年仏教徒への要望	4～5
9・2	19310220	仏教と宗教	1～15
9・3	19310320	反宗教より真宗教へ	1～11
		宗教とマルキシズムの対論	12～22
		仏教の特色	34～57
9・4	19310420	反宗教より真宗教へ（二）	1～11
9・5	19310520	封建的遺習の打破	1～13
		「共生史観」講義要項	14～22
		近詠（和歌）	40～41
9・6	19310620	小学校に於ける作業教育の実際	2～14
		「共生史観」講義要項（二）	15～30
		折にふれて（和歌）	31～32
9・7	19310720	過去十年を顧みて将来の十年を望む	1～12
		「共生史観」講義要項（三）	13～27
		説一切智願・得金剛身願	41～50
9・8	19310820	「共生史観」講義要項（四）	1～29

		近詠（和歌）	30～32
		幼児の教育	61～65
9・9	19310920	朝のよろこび	1～4
		「共生史観」講義要項（五）	5～28
9・10	19311020	進みゆく共生	1～9
		現代仏教の重点	10～34
9・11	19311120	迷信に悩むものへ	1～16
		念仏申すとき　問と答	17～20
		信仰の世界	21～27
		支那浄土教	46～51
9・12	19311220	善導大師以後の支那浄土教	1～13
		満洲事変と国民の覚悟	14～20
10・1	19320120	昭和七年を迎ふ	1
		日本の大乗化	2～7
		総選挙を前にして	12～13
		政界寸評	28
		日本国体の国際化	29～33
10・2	19320220	篤敬三宝	1～2
		近詠（和歌）	3
		婦人のめざめと正しき信仰	4～12
		時事寸評	13
		予は何故仏教を信ずるか	37～40
10・3	19320320	百姓昭明協和萬邦	1～2
		日支共生	3～10
		時事寸評	11～12
10・4	19320420	巻頭言	2～3
		父母より見たる法然上人	6～14
		時事寸評	15
10・5	19320520	初夏、国光輝く（巻頭言）	1
		自殺か永生か	4～10
		時事寸評	11
		法然上人の浄土教と世相の変化	36～41
10・6	19320620	共生十年（巻頭言）	1
		教育・産業・芸術の共生化を期す	2～12
		時局に処すべき信仰の確保	22～23
10・7	19320720	起て！起ちて国難を防げ	2～3
		ひかりの涙	7～16
10・8	19320820	自力更生	1
		浄土教と婦人	2～4
		時事寸評	12～13
10・9	19320920	法戒の仏教（一）	2～9
		悩める人へ	22～23
10・10	19321020	十月となる	2～3

		時局教化に対する仏教者の覚悟	4～15
		近詠（和歌）	16～17
10・11	19321120	現代生活と仏教（一）	2～7
		法戒の仏教（二）	8～14
		旅日誌	30～33
10・12	19321220	巨人日本	2～3
		現代生活と仏教（二）	4～10
		法戒の仏教（三）	11～15
		朝鮮に生れた教育の新生面	16～19
		信仰は進化なり	32～35
14・1	19360120	巻頭言拾壱年を迎ふ	2～3
		本年の予想	4～10
		母子救護事業	11～16
		増一阿含に就て　阿含と浄土教第三講	52～56
14・2	19360220	正信への歴史	2～7
		日本の新動向　その一	10～30
		雑阿含　阿含と浄土教第四講	51～56
14・3	19360320	日本の新動向　その二	2～14
		朝日丸より	15
		恩処に就て	47～56
14・4	19360420	母性の教養	2～8
		五蘊に就て　阿含と浄土教第五講	51～56
14・5	19360520	日本の農業を盛んにすべし	2～14
14・6	19360620	現下日本の三大問題	2～6
		来るべき不安に備へよ	8～9
		椎尾先生の質問	10～16
		台湾を巡りて	17～25
		邪見より正見へ　阿含と浄土教第六講	46～53
14・7	19360720	特別議会報告	2～12
		如来のまゝに	23～27
		因縁について　阿含と浄土教第七講	51～58
		自然院釈玄詞（椎尾ひとし先生を偲びて）	30～31
14・8	19360820	国民教育の基調	2～6
		開院式に勅語を拝して	6
		永遠に生くる理学者	22～30
		仏教の原理（一）存在思想を破るもの	55～60
14・9	19360920	苦難を超ゆるもの	2～9
		仏教の原理（二）真人生への進み	10～17
14・10	19361020	庶政一新成るか	2～9
		現代の信仰	10～18
		仏教の原理（三）因果より縁起へ	39～46
14・11	19361120	龍駕を帝国議事堂に迎へ奉りて	2～3
		迷信邪教を除く道	4～16

14・12	19361220	仏教の原理（四）縁起諸説について	40～43
		国語建設の運動者椎尾ひとし教授を偲びて	44～46
		内外の風雲と仏教思想	2～12
		共生は如何に進むべきか	14～25

表中※印は、椎尾の署名記事ではないが、関連する記事を示す。

3　会報「東海」と対比して、雑誌『共生』に特徴的な記述

内容にそれほど大きな差異は見られない。中学生へのメッセージは会報「東海」固有のものである。雑誌『共生』には、会報「東海」ではあまり取り上げられていない宗教論や、労働観に関する詳しい記述が見られる。国家観については共通した内容である。

(1) 宗教論

「正態の宗教」という論考の中で、椎尾は「宗教は奇蹟か」と問いかける。「宗教を以て唯不思議な事件とするものが多い。基督が大水を徒渉（かちわたり）したり、一片の麺包（パン）が多数の人を飽かしめたと云ふを以て奇蹟とし、神人なる証拠と考へ、又此の如き奇蹟あるは宗教の当然の事であつて、奇蹟がなかつたら宗教でないと考ふる人が少なくない」[6] とキリスト教を例示しつつ、宗教は奇跡ではないと断ずる。

その一方で、「仏教は変態宗教を迷信とした」と言明する。「大慈悲に基く生命尊重によりて犠牲供養の祭祀宗教を斥けたものは仏教である。正見の信仰によりて飲酒乱舞の祭祀儀式を排したのも仏教である。実に覚醒者の指導によりて一切衆生の帰趣たる覚性の完成を理想とせる仏教は、従来世人が認めて宗教とせるものが、飲酒であり狂酔であり迷妄顚倒であり変態邪見であることを指摘して宗教でないことを示した」[7] として、仏教を「正態の宗教」と捉えている。

「実生活これ真宗教」という論考では、「我等は一切の生活を理想に向はしめ、同時に最高の理想を現実せしむるものとして、真の念仏生活の興隆を主張する。実生活の充実が真の宗教であり念仏である。生活なき念仏は空蝉の声である」[8] と、念仏を通じての実生活の充実を説いている。

「暗い宗教と明るい宗教」という論考では、天国や未来を説く宗教は「暗き宗教」だとし、過去の宗教の多くは迷信的であり真の宗教では決してないと断言する。「人類が人類の道を進み行かうとした現実に直実に生きようとする所に仏教

があつた」との立場を示している。そして、「宗教は決して非事実的なものではない。マルクス一派のとらへて論ずる宗教は十九世紀の宗教であり、既に過去の宗教なのである。彼等は最近三十年の宗教の進みを知らぬのである」[9] とし、現実の宗教は変化しておりマルクス主義者が捉える宗教観を鵜呑みにしてはならないと喚起する。

このように、椎尾はキリスト教などを変態宗教として退け、仏教を正態宗教として捉えた。実生活の充実を目指す仏教こそが真の宗教だと位置づけたのである。

(2) 労働観

椎尾にとって、現実に真に生きることを中心に据えた宗教が仏教であった。そして、「如何なる場合にも人は真に生き実に働くことが尊い」と述べている。「健全なる身体と働き得る能力とを持ち働くに足る地位を得て渾身の努力が捧げられるもの、即ちその人格が発育して行くものに在りては、之を以て天地社会父母衆生の恩沢として感謝せずには居られない、内この感謝の溢れがあれば働いて礼の言へるが当り前である」と自らを取り巻く社会全般に対する感謝の念を強調している[10]。

読者投稿へ応答する記事では、「労働生活と私共の主張とは全然違ひます。私は我等人生から労働を駆逐することを希ふもので、労働神聖などと称して労働状態を保留せんとする思想を正面から攻撃する考へで居ります。随つて君の云ふ労働者の苦痛は能く諒解するものであつて、社会からその種の苦痛を除かんとする諸運動とも共働する所以であります」[11] と労働者が置かれている過酷な状況に同情的な立場をとっている。

一方、労働運動の指導者には手厳しい。「リーダーに煽動されることは労働者の不面目であり不利益である。リーダーなるが故に激越な煽動もすれば、ブローカーとなりてその利益を恣にすることゝもなり、多数労働者は却つて一層卑賤となり困憊するに至る。故に真の労働組合の成立はかゝるリーダーを離れることを意味するが、夫にしても鈴木（筆者注：文治）君でも賀川（筆者注：豊彦）君でも益々深入りして労働者の脾腑に喰ひ下がつて居る」と、キリスト者の指導する労働運動にはかなり批判的である。彼らは、「人心を眩ますやうに各方面に火の

手を上げさせては総同盟とか連盟とかで結束し鼓舞」させているが、①宣伝者がお高くとまり、指導者ぶって労働者の人格を認めていない。②国際的な交流もなく、自大自尊するにとどまっている。③幾多の道徳や信念が語られるけれども、真の人として生きず人間として共生していない。と問題点を列挙している。その上で、「仏教者も真の労働組合を建設されねばならぬ。この組合は単に権利の主張の為ではない。真生を完うせんが為の結合である。故に信仰のある作業生活を完うせんとするものである。如何に荒怠して如何に多く利せんかではない。如何に天地の力を空うせずして恭倹勤敏その業に服すべきかを第一とする。此には資本主も経営者も社員も現業手も同一結束に属することが出来る。共同の研究作業に生きんとするものである」[12] と、仏教を基盤とした労働組合の結成を提言している。

このように、椎尾は過酷な状況にある労働者には同情的な立場をとったが、労働者を指導するキリスト者などには厳しい眼差しを向ける。仏教こそが労働運動の受け皿だと、見立てていたのである。

(3) 国家観

椎尾は、「真に自覚ある国民を造る」ためには、教育が必要であると説く。しかし、「明治以来の教育はやゝねむれる教育」だったと見ている。「勤倹治産の道は本当の人間生活である日本の精神は国民の振起にあるのであります。然るに此精神的教育は明治に於て中々に出来て居りません。六ヶ年義務教育補習教育もありますが、人間の教育は生れるより死する迄、之で終ると云ふことはないのであります。青年は最も思想上に動かされ易き最も大事な時であります。少年青年の時に於て真に目醒めると云ふことは一生涯を有益ならしむる所以であります」[13] と、成人に至るまでの学校教育における重要性を指摘している。

労働運動と一体となっている社会主義運動にも警戒心をみせる。「やかましい共産党事件を見ても教育ある人々が、危険思想を有(も)つ様になつたと云ふことは困つたことであるが、又現在の教育上からかくなるのも無理ではない。斯る刺戟に出会つて火の点くのは当然な状態にある」と、教育の不十分さを指摘している。そして、「今の支那の状態を見ても考へられることで、安定せる国に於ては何人も国家の保護を受けることが出来るが、支那の如く国家に堅実なる力なきは惨めな

ことである。之に反して我国は皇室を中心として三千年来、綿々として続き来つたことは世界中この比が無い。かくて皇室の思召を眺める時、実に皇室と協力して行き度い気持ちになるのが自然である。それなのに国家社会の制度を破壊するやり方を考へるなどは甚しき誤りである」[14] と、社会主義思想や運動に対しては極めて否定的な考え方を示している。

椎尾は、東海中学校の講演でも、明治以来の学校教育の不備と宗教的教育の必要性、社会主義が国家を毀損する危険思想であることを指摘している[15]。これらは、講演を収録した会報「東海」の内容と合致している。

4　まとめ

東海中学校での椎尾は、「共生」の思想に裏打ちされた校訓「勤倹誠実」を掲げ、三綱領を定めた。現世にも浄土を主張し今を懸命に生きるという「共生」の思想のエッセンスを、中学生への生き方の指針として示し、天皇を中心とする国家を背負う人間の養成を目指したのである。そして、講演を通じて自らの言葉で語り続けた。一方、共生運動では、自ら労働者や農民などの中にも分け入って現実の問題とも対峙した。

これらは、浄土宗の教勢拡大という「使命」を強く意識した椎尾の両面であり、仏教を社会生活に生かそうとする面で通底している。

雑記『共生』の記事には、教勢拡大するキリスト教に対する警戒心が見て取れる。なかでも、労働運動を指導する賀川豊彦らのプロテスタンティズムへの対抗心が顕著である。また、皇室を中心とした明治国家を毀損することを忌み嫌い、社会主義運動や思想に対して否定的な立場を明らかにしている。

椎尾は、校長を辞したのちも名誉校長として東海学園に深く関わった。同時並行して展開された共生運動の動きは、学園史研究にとっても見落とせない視点である。雑記『共生』が電子化の完了した会報「東海」に匹敵する重要な史料であることは間違いない。幸い、東海学園大学には、林霊法文庫と袖山寄贈本をあわせれば、欠落はあるものの多くの巻号が揃っている。ただ、両者とも雑誌の劣化が著しい。学園史研究の前進のためにも、是非電子化をお願いしたい。

1　永井隆正「椎尾辨匡の仏教教育論」(『浄土宗学研究』第 9 号、1977 年)、髙山秀嗣「浄土宗教育史における椎尾弁匡」(佛教大学総合研究所編『法然仏教とその可能性』法蔵館、2012 年）などがある。

2　東海中学・高等学校図書館に所蔵されている「会報」は、発行年月日が 1920 年（大正 9）9 月 1 日付から 1943 年（昭和 18）9 月 10 日付までで、簿冊二冊に収録されている。第 1 号の「会報」は 1911 年（明治 44）の発行で、年 1 回の発行であったが、1920 年 9 月 1 日付の第 10 号の 1 以降、年 10～12 回の発行となった。「校友会会報」(第 10 号の 1～)、「会報」(第 11 号の 1～)、「団報」(第 32 号の 6～）と表記は異なるものの、戦時下まで発行され続けた。東海の題字が共通しているので、簿冊の表記に合わせてここでは一括して会報「東海」として扱う。

3　記事は全部で 70 本あった。講演録が 53 本、彙報欄などに日時や演題のみ示したものが 17 本である。記事のある 1922 年から 1942 年は椎尾校長時代（1913 年 3 月 13 日～1920 年 1 月 22 日）には該当せず、名誉校長となって以降の期間である。

4　藤森雄介「創刊初期における雑誌『共生』から見る椎尾弁匡と「共生」運動の展開」(浄土宗総合研究所『仏教福祉』第 3・4 号、2001 年、98～100 頁）

5　『新纂浄土宗大辞典』330 頁。

6　椎尾辨匡「正態の宗教」『共生』第 1 巻第 2 号、1923 年 6 月、6 頁。

7　椎尾前掲「正態の宗教」、17～18 頁。

8　椎尾「実生活これ真宗教」『共生』第 1 巻第 2 号、1923 年 6 月、23 頁。

9　椎尾「暗い宗教と明るい宗教」『共生』第 9 巻第 3 号、1931 年 3 月、16～17 頁。

10　椎尾「働いて礼言ふ人」『共生』第 2 巻第 3 号、1924 年 7 月、50 頁。

11　椎尾「福原栄一君に答へて」『共生』第 2 巻第 5 号、1924 年 9 月、55 頁。

12　椎尾「仏教徒の社会事業（其二)」『共生』第 3 巻第 7 号、1925 年 9 月、28～29 頁。

13　椎尾「日本人の使命」『共生』第 4 巻第 12 号、1926 年 12 月、26～27 頁。

14　椎尾「三宝の体現生活」『共生』第 6 巻第 7 号、1928 年 7 月、7 頁。

15　髙木前掲「東海中学校における椎尾辨匡の講演活動－「共生」の思想と校風をめぐって」(羽賀祥二編『近代日本の思想と地域社会』吉川弘文館、102～128 頁、2018 年）

キーワード：椎尾辨匡、共生、会報東海

（たかぎ　しげき　東海高等学校教諭）